

お茶の水地理学会の発足にあたって

お茶の水地理談話会を発足させてから満10年になる。初めは教官がお互いに今やっている仕事を紹介し合うという位のつもりであった。公の学会での発表という形はあっても、専門以外の会場に出かけて行くのは億劫なものである。教室で隣り合わせにしながら「隣りは何をやるぞ」の状態では、諸事円滑さを欠くというものであろう。専門の分野が少しずつ異なる教室員が、夫々お互いに判り易く自分の研究について解説してみせることは、大げさに考えれば学問や思考法を一般に広めてゆく教育や啓蒙の手始めと言えないこともない。折角そのような機会がもてるなら、教官だけが聞くのでは勿体ない。同窓の諸君にも聞いてもらおうではないか。こうして第1回談話会を発案者である筆者が話者を買って出て、1973年7月21日（土）に開催した訳である。

その折は来会者も多く、同窓生の反応からなみなみならぬ熱心さが感じられたので、同窓生からも話者に出てもらい隔月に開いてみるのが計画されるようになった。爾来予想より遙かに順調に談話会が繰り返し開かれ、教室員、同窓生らの爽やかな交流の場として所期以上の目的を果して来たように思う。

一方地理学教室の同窓生は、今年1982年3月に第30回卒業生を送り出して、総数は無慮450名ほどとなる。来年からは定員が増した関係で、年々20名の卒業生が加わり、3年後には500名を突破することは自明のことである。教室の同窓会はかつては運営されていたこともあったが、既に長い間立ち消えた状況にあり、自然再燃を待つまでの間、談話会が機能的に代行することも卒業生数の増大と共に急務とも思われて来た。

「お茶の水地理」という雑誌の創刊は1959年5月である。当時の教室主任渡辺光教授の発意により、教室活動の紹介連絡誌と言った内容で学生が編集にあたった。卒論の要旨や巡検の記事のほか教官や卒業生の随想が掲載された。これも年1回着実に発刊され今回で第23号に及んだ。1966年の第8号から編集陣に教官が加わり、研究報告を加えてやゝ体裁を整えるような変化があった。この雑誌も同窓会誌的側面を兼ねて卒業生名簿を付して来たが、名簿のページ数が増大して、こゝ数年、毎号全員の名簿を付することが困難になっている。

上述のように教室の発展に夫々に役割を果して来た談話会や雑誌を、更に将来の規模の拡大や質の向上に備えて整備し組織化してゆくことは自然の勢いであり、今がその転換の時機ではないかと考え及ぶに至った。これを実現するには教室員、現役の学生はもとより、卒業生を含め全員が協力して明確な組織をつくり、ある程度計画的に運営していくことが必要ではないかと思う。お茶の水女子大学に限った場合でも、哲学科には哲学会、史学科には読史会、国文学科には国文学会、教育学科には教育心理学会等があり、それぞれが「学会」組織を持ち、立派な雑誌を刊行している。そしてそれらの「学会」は同窓会の機能をも併せて果しているようである。とくに読史会や国文学会は30年近い歴史を経て来たと聞いている。地理学科の場合は、組織編成の点など他学科にくらべて出遅れた感はあるが、雑誌の定期的発刊や談話会の開催にみられるような実績の積重ねについては、とくに遜色はないように思う。現状でいさゝかの危惧があるとすれば、少し先の将来にあり、教室員が交代しても、この教室員と同窓生をつなぐ機能を果すような組織が存続することを願っている。その意味で「学会」設立の機は熟しているものと判断される。

最近世間では一般に生涯教育や社会教育の重要さが指摘されている。女子大学の社会的存在意義をこのことにかさねて考えた場合、単に公開講座や学内施設の開放といった行事にとらわれるものではないと思う。先ず手近なところで卒業生の知的学問的な據り所として、生涯にわたり教室がその中心的機能を果たすことを考えてよいのではなからうか。現役と同窓生、教官のつくる知的ミーティングによって、互いを啓発し合い、情報を交換し合い夫々の向上をはかるための具体的な機関として「学会」を組織するのは、このような生涯教育的意義があり、時流に順応し発展することが大いに期待される。女子の社会的活動は以前に比べれば活発になったとは言いながら、夫々の職場や公的な場で様々な不当ともいえる辛酸を嘗め孤立させられるような経験をもたれる卒業生も多かろうと思う。そうした体験を澁ね返すに一番好い方法は知的な向上と新しい情報の獲得に他ならない。家庭に籠った主婦も社会復帰のきっかけをつかむには、実力を復活させ知的に装備するのが前提であろう。こうした機能をも果そうとするのが今回の「学会」設立の趣旨である。

同窓会は先ず旧交を温め友情を確かめ、生活に関する相互扶助的な役割をも果たす。「学会」はこうした同窓会とはいさゝか内容や意義が異ってはいるが、同窓会の機能も「学会」懇親会など付随的な行事で、一応果されるものと確信している。「学会」という呼び名から公的な学会をスーパーインポーズして固苦しく考えるのは行き過ぎである。卒業生、学生と共にこの「学会」を有効に有意義に、そして親しみ易く育成していくことが、教室員の念願であり、卒業生全員を含め関係される方は是非とも柔軟に対応し協力して載けることを切望する。

1982年4月

式 正 英
(地理学教室主任)